

つぶやきミステリー

ヤジキタ

<前編>

密室に転がる
若い女性の死体。

これは事故か、
自殺か、それとも
殺人か――

ツイッターで連載中の
ミステリー小説を、
第1話から第256話まで
一気読みできます！

つぶやきミステリー

ヤジキタ

<前編>

著：万 大

【目次】

第1章 望んでいた遭遇 … p.05

第2章 許されざる捜査 … p.17

第3章 眇く果ての真実 … p.35

第1章 望んでいた遭遇

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第1話】五月晴れとは、まさにこんな日のことを言うんだろうな。鬱陶しい梅雨が毛虫にも増して大嫌いな矢嶋鈴香は、雲も疎らな青空を見上げて思った。毎夜毎晩、てるてる坊主を作っては、自分の部屋の軒先に吊るし続けたのが実を結んだのだろう。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第2話】自分で自分を褒めてあげたい。鈴香は西の方角へと傾き始めた太陽の光を肌で感じながら、ふと、あの灼熱の塊からは、紫外線が容赦なく降り注がれていることを思い出した。白魚のような肌を自称する彼女は、てるてる坊主なんか拵えた自分を呪いたくなかった。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第3話】学生寮に帰ったら、坊主どもをすべて逆さ吊りにしてやる。そう固く心に誓った鈴香は、当面を凌ぐ日陰と、提出期限が明日に迫ったレポートを片づける空間を確保すべく、適当な喫茶店を見つけることにした。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第4話】彼女が入ったのは、最近注目を浴び始めたカフェ。低価格帯の「本日のコーヒー」と、シリアルの種類が充実したフードメニューが人気だ。鈴香は本日のコーヒーとドライフルーツの小袋を注文し、ポーションタイプのミルクとシロップを2個ずつ貰った。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第5話】本当に飲みたいカフェオレは単価が高いので、ミルクを多めに入れることで妥協している。脳みそに働いてもらうには相当の糖分も必要だ。これらを2倍摂取することで、太るリスクも倍増しそうだが、それにはあえて触れないことにしている。

つぶやきミステリー「ヤジキタ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第6話】学生アルバイトらしき男性店員から注文の品を受け取ると、禁煙席の一つを確保した。テーブルの上にトレイを載せ、傍らに図書館から借りた本を数冊置くと、トイレに向かうべく財布と携帯電話の入ったハンドバッグを手に取った。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第7話】そういうや、トレイとトイレって似てるなあ。などとどうでもいいことを考えながら、案内板が示す方向へ歩く。木目調の壁から成る袋小路の三方に、それぞれ一つずつドアがある。突き当たりの扉の向こうには、掃除用具が入っているようだった。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第8話】向かって左側のドアには、トイレを示すマーク——男女のピクトグラムで表されたアレだ——が付いていたので、ノブを回して押し入った。ウォシュレット付きの洋式便器が出迎えてくれる。頑に和式を貫き通す寮のトイレに、見習ってくれよと言いたくなる。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第9話】ズボンを下ろして座った矢先に、ドアのノブがガチャガチャと忙しなく動いた。続いて乱暴に扉を叩く音。ちょっと、落ち着けやしないじゃない。鈴香は見えない相手を睨みつけた。くそっ、と女の苛立った声が聞こえたが、やがて御手洗いに静寂が戻った。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第10話】その後はつつがなく用を済ませた鈴香は、先ほどの柄の悪い女が外で待っていることも考え、ゆっくりとドアを開けてみた。すると、ちょうど向かいのドアに、中年女性が太い身体を滑り込ませているところだった。さっきのは、あのオバハンだったのか。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第11話】閉まったドアを見て、あ、そっちが女性専用だったのか、と今更ながら気づいた。男は洋式でも立って“する”生き物だから、便器やその周辺が汚れていることがあるが、この店はこまめに掃除しているのか、見回す限りでは綺麗なものだったからだ。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第12話】キンモクセイの芳香付きの消臭スプレーが置いてあるところからも、店側の配慮が窺える。次の人のために、という表現をよく耳にするが、どちらかと言うと臭い代物を排泄してしまった人のためにあるのではないか。鈴香はどうでもいいことを分析していた。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第13話】自分の席に戻る途中、ガラス張りの壁越しに見える喫煙席スペースから、坊主頭の大柄な男がこちらへ向かって来た。丸太ばかりの腕に彫られた入れ墨が、昼下がりのカフェには不釣り合いだ。繁華街のクラブと間違えて入店してしまったのかもしれない。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第14話】トイレの案内板を一瞥したことからも、彼もまた“どちらかを催した”一人であるのは確かだ。どんな人間でも出すものは出す。それが自然の摂理なのだ。鈴香はますますどうでもいいことを思考しながら、木製のチェアに腰を納めた。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第15話】程よく冷めたコーヒーにミルクとシロップを溶け込ませ、マドラーでよくかき混ぜると、キャメル色のドリンクの出来上がりだ。鈴香は優雅な気分で1杯180円の香りを堪能しつつ、カップを口に近づけた。甘味と苦味が同居した液体が、喉を流れていく。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第16話】「うっ……」鈴香が声を詰まらせた。コーヒーカップが手から零れ落ち、床にぶつかった衝撃で音を立てて割れた。中の液体が磨き上げられたフロアを滑っていく。彼女は口にしたもの吐き出し、喉を搔きむしり、膝折れ、その場を這いずった。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第17話】店内のあちこちから悲鳴が上がった。鈴香は恐ろしい形相になっている。そして勢いよく口から血を噴き出した。また悲鳴。ちくしょう、席を外している間に毒を盛られたんだ……。気づいた時には、もう後の祭り。彼女の意識は急速に衰え、やがて消えた。

つぶやきミステリー「ヤジキタ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 18 話】2 時間サスペンスの見過ぎかな。鈴香は苦笑してかぶりを振った。コーヒーを飲むといつも、なぜか自虐的な妄想が始まってしまう。いやいや、あたしは被害者ではなく、探偵として大活躍したいんだけどな。ひょっとして、骨の髓まで“M”なのかしらん。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 19 話】それより、一息ついたらレポートに挑まなくてはならない。さらなる糖分を投入すべく、ドライフルーツの小袋を開けようとしたとき、新しく店に入って来た男の顔に視線が釘付けになった。その顔は見知ったもので、思わず声を上げていた。「いちにい」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 20 話】男もこちらに気づいたようで、表情に微かながらも驚きをみせた。「鈴香じゃねえか。どうした、こんなところで」「見ればわかるでしょ。学生の本分をまっとうしてんの」彼女は無い胸を張ってみせた。「どう、鑑じゃなくって?」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 21 話】失笑する男に「そう言ういちにいは?」と返す鈴香。いちにい、というのは彼女独特の呼び名で、彼の本名は北岡一郎。母方の従兄にあたる。鈴香とは、ちょうど一回り年上だ。会うのは鈴香の姉・桜子の披露宴以来だから、ほぼ三年ぶりとなる。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 22 話】なぜか言葉に詰まった従兄に、鈴香が勘づいた。顔を綻ばせながら尋ねる。「もしかして、お見合い中?」おいおい、こんなよれよれのスーツが俺の勝負服って言うのかよ。ていうか、こんなどこでお見合いするかよ、フツー。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 23 話】というような返しを望んでいたのだが、相手の答えは素っ気ないものだった。「ああ、まあな」右手をズボンのポケットに突っ込みながら、鈴香から目を逸らしている。その話題を、これ以上掘り下げられたくないようだった。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第24話】都合が悪くなると出る癖は、今も昔も変わっていない。鈴香も彼の本当の用事をわかっていて、あえて茶化してみたのだが、変に生真面目なところもまた、彼らしい。「じゃ、また今度、ゆっくりな」彼は一瞬だけ笑みを見せると、喫煙席へと歩いていった。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第25話】ガラスの向こうに、先ほどそれ違った大男がいた。連れらしい国籍不明の女と、接吻しているのではないかと思うくらい顔を近づけ、話し込んでいる。女は髪こそブロンズだが、肌は醤油を塗り込んだように不自然な日焼けをしていた。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第26話】その手前のテーブルに座った北岡を、向かいに座っていた背広姿の若い男が出迎えた。北岡に敬意を払う素振りからして、おそらく仕事場の後輩だろう。北岡はテーブルの上に用意されていたカップを口に運び、その味に文句をつけるように口を尖らせている。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第27話】その癖も、鈴香がまだ幼い頃に見たものと一緒にだった。伯母さんにお小言を喰らい、仏頂面をする学ラン姿の北岡。思い出してみて、なんだか微笑ましくなった。それが今や立派な任務に就いている。その点では彼を尊敬できるし、頼もしくも感じる。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第28話】もっとも、恋愛感情があるわけではない。子どもの頃に「大きくなったら、いちにいのお嫁さんになりたい」と宣言したわけでもない。「あたしは私立探偵を目指すから、いちにいは殺人課の刑事になってね」という、押しつけをした覚えはあるが。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第29話】その誘い文句もまた酷い。「ほら、名探偵には必ず、引き立て役の冴えない刑事が付き物でしょ」当時の北岡は半ば本気で憤慨していたが、結局、彼は当たらずとも遠からずな職業を志望したわけだから、鈴香を見る目があったと言えなくもない。

つぶやきミステリー「ヤジキタ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第30話】おっと、今はレポートに集中しないと。鈴香は改めて借りてきた参考資料に目を通すことにした。彼女の専攻は西洋美術史だ。今回のレポートは「『最後の晩餐』の技法と表現」。言わずと知れたレオナルド・ダ・ヴィンチの代表作をテーマにしている。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第31話】キリストが弟子の中に裏切り者があることを告げる場面だが、ダ・ヴィンチ版『最後の晩餐』では、ユダは裏切りの報酬である銀貨30枚の入った袋を握っている、とされている。師から指摘を受けたとき、彼の心臓はさぞかし早鐘を打っていたことだろう。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第32話】「ちょっと、トイレの芳香剤がキツすぎるんだけど。あれじゃ、せっかくのコーヒーの香りも台無しよね」尖った声にカウンターを見やると、若い女が必要以上に大きな声で店員に詰め寄っている。あんたの性格のほうが、よっぽどキツすぎるんだけど。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第33話】って切り返しちゃいなよ、店員さん。心の中で助言しながら、カウンターに一番近い席に座っている、リクルートスーツ姿の瘦せぎすの男に目が止まった。クレーム女に、びびっているのだろうか。亀よろしく首を竦め、震えを抑え込むように身を縮めている。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第34話】あの二人が夫婦になったら、想像を絶する鬼嫁地獄絵図が描けるだろうに。なおも女は、日頃の鬱憤をぶちまけるように喚き立てる。「だいたいアタシ、ラベンダーの匂いが嫌いな人なの。人工的に作ったような、安っぽいのは特にね」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第35話】それを聞いて、次のツッコミどころを探していた鈴香に、ある疑問が湧いた。彼女が見た消臭スプレー缶には、キンモクセイのイラストが載っていたはずだ。女性専用トイレとは、別の香りだったということだろうか。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第36話】「お客様に不愉快な思いをさせてしまったこと、誠に申し訳ございません」それまでカウンセラーのように黙って苦情を聞き入れていた店員が、深々と頭を下げた。それよ、その言葉を求めてたのよアタシは。女の満足した顔が、背中越しにも見て取れそうだった。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第37話】「タバコを好む人とそうでない人がいるように、香りに対する嗜好も人それぞれです」顔を上げた店員は、なぜか喩え話を始めた。「ラベンダーの香りを好まないというご意見も尊重すべきですし、好きな方には充分に楽しんでいただきたい。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第38話】ですから私どもの店では、愛煙家の方も、タバコの煙を苦手とするお客様も気持ちよく過ごしていただくために、喫煙席を完全に隔離することは避けつつ、高性能の分煙装置を完備し、どなたさまにも開放的な空間になるような設計を行っております」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第39話】店員は譲みなく、聞えることなく語り続ける。クレーム女は腕組みしたまま、途中で遮ることもできず、黙って話を聞いていた。「——お客様のご指摘は貴重なご意見として、私が責任を持って本部にお伝えいたします。ありがとうございました」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第40話】店員は晴れ晴れしい微笑みを浮かべながら、再び深々と頭を下げた。女は何か言いたげにしていたが、どう返していいのか考え倦ねているように見える。結局「別にいいんだけど」とだけ言い残し、つかつかと喫煙席へ戻っていった。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第41話】抜け目ない店員だな、と鈴香は感心した。客の怒りを静めるために表向きは謝罪の意を示し、その狭間でちゃつかりと自分の主張と店の宣伝をしている。女が喫煙者であることを巧みに突いて、さり気なく論点をずらすことも忘れてはいない。

つぶやきミステリー「ヤジキタ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第42話】これがホントの「煙に巻く」というヤツか。などと能天気なことを抜かしている場合ではない。今はレポートに全神経を向けなければ。大学の図書館のほうが騒がしくなくて集中できる、という意見もあるだろうが、鈴香にしてみればそれも違った。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第43話】ひとつは図書館が飲食禁止であることだ。ここでは気軽に糖分を補給できるし、コーヒーの香りを嗅ぐことで、ジグソーパズルのピースが嵌るような、その場の的確な表現を思いつくことが多い。カフェインによる眠気を覚ます効果も、ある程度は感じられる。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第44話】もう一つの理由は深刻だ。学内には、しつこく付きまとう男の存在があった。棚橋という、目つきも笑い方も何ともいやらしい感じの学生だ。鈴香が図書館で勉強していたのを目敏く見つけて、隣に座ってちょっかいを出してきたこともある。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第45話】かと言って、男子入るべからずの寮に帰ればいいという話でもない。あそこは節制もプライバシーもないところだ。いつの間にか、自分の部屋が酒盛り場になっていることもままある。出費は惜しいが、巷の喫茶店に入り浸るのが一番なのだ。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第46話】だのに、ここでも阻害するものは多々ある。その最たるものは、間近の丸テーブルを囲んでいる、三人のカシマシ中年娘だ。彼女たちがけたたましい笑い声を炸裂させるたびに、テーブルに載ったコップの水に波紋が広がっている。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第47話】どれも水風船のような身体を揺すりながら、窮屈そうに身を寄せ合い、実のない鼎談に花を咲かせていた。その中でもひときわ肥えた女は、鈴香がトイレを出るときに見かけた人物に相違ない。淡いピンク色のワンピースから、今にも悲鳴が聞こえてきそうだ。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第48話】「ウチの旦那ときたら」「やーだ、佐々木さん」「あの奥さんったらね」「やーだ、佐々木さん」断片的に耳に入る情報によれば、眼鏡をかけた佐々木というもっとも幅広の女がリーダー格で、口数も多い。他の二人は取り巻き役に徹しているようだった。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第49話】この騒がしい水風船たちを、何とかしてよ、店員さん。さっきのように鮮やかに言い包めちゃってさ。期待を込めた視線を送った鈴香だったが、彼はリクルートスーツの若者に話しかけられていた。若者にしては猫背で、動作にキレも覇気もないのだが。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第50話】それで就職活動が務まるのか、こちらが心配になってしまふ。若者は何かを必死に訴えているようだった。感じとしてはクレームと言うより、教師にクラスメイトの悪行を言いつけるのに近い。もしかすると、鈴香と同じ不満を抱えていたのかもしれない。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第51話】口達者な店員はひとつ頷くと、レジ前に立っていた女性店員を呼びつけた。彼から指示を出された女性店員は、カシマシ中年女のテーブル——を通り過ぎ、トイレのある袋小路へと向かった。トイレの扉は、ここからは死角になっていて見えない。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第52話】間もなく女性店員が戻ってきて、先輩に対して首を横に振っている。少し深刻そうな表情だ。唯事ならぬ気配を察したのだろうか、喫煙席の方から北岡がやって来た。その弟分格の男も。どうかしましたか、と店員に尋ねている。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第53話】彼らに話していいものか、迷っている風な店員に対し、北岡たちは懐から、二つ折りの黒い携帯電話のような身分証明書を取り出し、水戸黄門の印籠よろしく見せつけた。「我々、こういう者です。何か不審なことがあったのであれば、お聞かせ願いますか」

つぶやきミステリー「ヤジキタ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 54 話】北岡たちの自己紹介は、店員たちからの猜疑を解くと同時に、新たな緊張感を生んでしまったようだった。どうして彼らが自分たちの店にいたのか、詰問するかのような視線を投げかけている。鈴香は意識を集中し、彼らの会話に聞き耳を立てることにした。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 55 話】「お客様が、もう 15 分以上経つというのに、御手洗いから戻って来られないんです」意を決したように、先輩店員が口を開いた。「ですから、彼女に頼んで確認してきてもらったんですが、ドアを叩いて呼びかけても、返事がないらしいんです」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 56 話】傍らで女性店員も頷いている。「やっぱり。俺も入りたかったんだけど、なかなか出てこないからさ。今にも漏れそうなんだよねえ」緊張感のない声を出しているのは、北岡の子分だ。北岡は相棒を睨みつけるようにしてから、小声で打ち明ける。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 57 話】「実は我々は、この店がある犯罪取引に使われる、という情報を掴んで待機しておりました」目を見張る店員たちに、彼は続けた。「その客がその“取引”に絡んでいる可能性もないとは言いません。一緒に調べさせていただけますか」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 58 話】許可を貰うというよりは、主張を押しつけるような物言いだ。「すいませんねえ」子分がその場を取り繕うように、罰の悪そうな顔をした。自分を悪く思われたくないのだろうが、逆に無責任さを引き立ててしまっている点で、損をしている。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 59 話】「——わかりました。それではトイレの鍵を持って来ますので、少々お待ちください」男性店員が他のスタッフに何か指示を出してから、従業員用のロッカールームへと姿を消した。なるほど。就活生が訴えたのは、のことだったのか。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第60話】鈴香は一人納得し、当の青年を見やった。彼は便意を必死にセーブしているせいか、それとも突如現れた屈強そうな男たちが目の前に屹立しているためか、額や首筋が汗で濡れているのが傍目にも窺えた。その湿りを、神経質そうにハンカチで拭っている。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第61話】中年女たちのグループは、周囲の変化にも気づくこともなく、相変わらずの音量で自分たちの世界に浸かっていた。それを集中力と捉えるのなら、自分はあの肉襦袢たちを見習わなければならないのかもしれない。でも、いやしかし、だけれどもっ。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第62話】鈴香は思わず立ち上がっていた。鍵を持って来た店員と一緒にトイレに向かう北岡たちの後を、追った。この席からでは事の成り行きを見ることはできない。気になることは自分の目で確かめないと。レポートはこの際、後回しだ。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第63話】袋小路を曲がると、北岡が共用トイレのドアを叩いているところだった。が、やはり反応はない。「開けますよ、いいですか」という呼びかけへの返答も無い。北岡のアイコンタクトにより、店員が解錠に取りかかる。そして、扉が開かれた。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第64話】男たちが息を飲む音が聞こえた。彼らの脚の間隙から覗けるトイレの床に、何かが横たわっていた。それが真っ赤な長袖のニットシャツに、薄汚れたGパンといった出で立ちの、髪の一部を紅に染めた女であることに気づくのに、数秒遅れた。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第65話】女は不自然なうつ伏せのまま、微動だにしない。顔はこちら側に向いていたが、見開かれた目は瞬き一つしない。苦悶の表情のまま凍り付いたその顔は、彼女が失神しているわけでも、ましてや熟睡しているわけでもないことを、冷徹に伝えてくるのだった。

つぶやきミステリー「ヤジキタ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第66話】北岡が屈んで、自分の耳を女の鼻先に近づけた。さらに女の首筋に自分の指を当ててみる。「……眞鍋、署に連絡だ」事態を悟った北岡が、後輩に指示を出した。その言葉の意味を飲み込めないでいる彼に、もう一度発する。「署に連絡しろ。急げっ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第67話】落ち着き払っているのか、頭に血が上っているのか、温度が一定していないような口調だった。彼もまた、気が動転しているのかもしれない。それは鈴香も同じだった。今、目の前で人が死んでいる。これは紛れもない事実であり、回避し得ない現実なのだ。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第68話】そしてこれは、鈴香が心待ちにしていた現実ではなかったか。しかも、これが殺人事件であったなら、被害者は窓のない、施錠された密室で事切れていたことになる。密室殺人。彼女は不謹慎にも、感情の高揚を抑えきれないでいた。（第1章・完）

第2章 許されざる捜査

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第69話】「馬鹿言うな」北岡一郎が声を上げた。たまたま現場に居合わせた従妹の提案に、到底飲めぬといった体で、トイレの入口に仁王立ちしている。「何の権限があってそんなことを。勝手にべたべたと死体や現場に触れていいわけがないだろうが」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第70話】「こういうのは初動捜査が肝心でしょ。もしこれが殺人だったとしたら、みすみす犯人を逃しかねない」厳しい顔で睨みつける屈強な身体つきの男に、矢島鈴香も一步も怯まず、主張をぶつける。「勝手に事件と決めつけんなよ」「もし、って言ってるでしょ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第71話】北岡は体中の毒素を抜くように、一つ大きな溜息を吐いた。「見たところ彼女に外傷はない。俺の見立てでは急性心不全だ。覚せい剤を大量摂取した場合なんかに、よくあることだ」「それだって結局、いちにいの先入観じゃない」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第72話】「密室殺人と比べたら、やっぱり現実味がある」憮然とした表情で北岡が切り返す。「だいたいお前は昔から、推理小説の読み過ぎなんだよ。密室トリックなんて、架空の世界の話だ」「あたしは何も、密室=トリックと考えているわけじゃないんだって。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第73話】なぜ密室ができたのか、それを解明したいだけなの」「同じことだろ。お前は名探偵を気取りたいだけだ」図星を突かれたのか、鈴香が二の句を飲み込んだ。「……たしかに、そうかもしれない。でもさ、いちにい、子供の頃に約束してくれたじゃない。

つぶやきミステリー「ヤジキタ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第74話】「名探偵のアタシを、名脇役の刑事として、命懸けでサポートしてくれるって」「そんな約束してねえよ。話に尾ひれつけんのにも程があるぞ。そもそも俺は刑事じゃないって、何度言えばわかるんだ」「似たようなものじゃない、麻薬取締官なんて」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第75話】たしかに、麻薬取締官は特別司法警察員として、薬物犯罪の捜査活動に従事している。麻薬組織の摘発には危険も伴うため、警察官同様に拳銃の携帯も認められているし、逮捕術も会得している。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第76話】ただ、彼はあくまでも薬物犯罪のエキスパートで、厚生労働省の職員である。警視庁の組織犯罪対策部と麻薬が絡んだ合同捜査を行うことはあっても、刑事部の捜査一課に属しているわけでもないのに、殺人事件を捜査する権限はない。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第77話】「餅は餅屋だ。捜査はプロに任せとけ。ましてやお前は一般人だろ」その言葉に、鈴香がむっとする。才能の片鱗も認められない三流タレントに、“素人”呼ばわりされるような腹立たしさを感じた。「じゃあ聞くけど、“一般人”的定義は何?」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第78話】「ガキみたいな質問すんな」「ええ、どうせアタシはお子様ですよ。だから好奇心旺盛で、何でもすぐに首を突っ込みたがるんだ。面倒なことは極力避けようとする、腰の重いオッサンと違ってね」「誰がオッサンだ、コラ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第79話】「あら、誰もいちにいがそうだとは言ってませんが」「確実に俺を見て抜かしたろうが」「被害妄想は止めてください」「ま、まあ二人とも」傍らで困惑していた眞鍋が取りなすも、親戚同士の言い争いは終わりそうもない。むしろ、ますます白熱している。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第80話】「さっきも言ったけどよ、彼女に外傷はなく、心臓発作の疑いがあること。さらに、このカフェで覚醒剤売買の予告があったことからも、その取引が絡む薬物中毒だと考えるのが自然だ」最近、立て続けに厚生局の麻薬取締部宛に、差出人不明の封書が届いた。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第81話】内容は薬物売買の取引場所と日時を指し示すものだった。悪戯を疑いながらも現場に張り込んだところ、何れの情報からも現行犯逮捕に漕ぎ着けたのだ。濡れ手で栗の成果に、捜査官の間では冗談混じりに、謎の密告者を義賊扱いする者もいるらしい。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第82話】「それのどこが自然なわけ」偏差値至上主義の女教師が、出来の悪い塾生を見下すようだ。「売買は相手がいなければ成立しない。密売人は何処へ行ったのよ。それに、その密告者。闇の情報を次々に明るみにするそいつこそ、もっとも怪しいじゃんか。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第83話】密告者も見つからないうちに、中毒死と結論づけるのは早すぎだって」「無理やり殺人に結びつけるのも短絡的だろが」「だから、アタシはそんなふうに頭っから可能性を潰されるのが我慢ならないのっ」「ま、まあまあ二人とも」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第84話】真鍋の後ろからは、店の客たちのざわざわとした喧嘩が聞こえる。二人の痴話喧嘩にも似た口論に、何事かと興味本位で話合っているのかもしれない。「ねえ、何があったの」と店員に問い合わせているのは、おそらくカシマシ中年娘たちであろう。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第85話】「とにかく、お前は大人しく警察が到着するのを、席に戻って待ってろ」場の雰囲気に気まずさを感じたのか、北岡が話を収束に持っていくとする。「日本の警察は優秀だ。お前の力を借りずとも、不審な点が僅かでもあれば、徹底的に捜査してくれるさ」

つぶやきミステリー「ヤジキタ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 86 話】 担ぐような説得に諦めてくれたのか、鈴香がゆっくりと頷いたように見えた。北岡は精一杯の柔軟な表情を保ちながら、従妹の肩を叩いた。そして彼女の身体を反転させ、元の席へと促そうとした時だった。「悪事を働く不届き者は、親兄弟でも許さない」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 87 話】 女性から発せられたにしては野太い声が、狭い袋小路に反響した。「あ？」 聞き咎めた北岡を、鈴香はにんまりと笑いながら見上げた。「覚えてるよね。いちにいが小学生の頃にテレビ放映されてた『奉行戦士キンサーン』の決め台詞。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 88 話】 再放送やってた時に、一緒に観たことがあるでしょ。大学生にもなって、悪者に負けそうになった主人公を、お茶の間から大声上げて応援してたじゃない」「北岡さんに、そんな過去が？」 真鍋が目を見開き、明からさまに一步退く。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 89 話】 「おっ、お前。何でそんな話を今ここで」 明らかに動揺の色が見て取れる北岡に、言ってやる。「いちにいは、あんな子供騙しのヒーローよりも、よっぽど本物のヒーローだと思ってる。でなきゃ、麻薬取締官なんて危険な仕事、務まんないよ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 90 話】 北岡がしきりに目を瞬かせるなか、鈴香は続ける。「伯父さんから聞いた話だけど、いちにいは幼馴染みが覚醒剤に手を染めたのをきっかけに、今の仕事を選んだんだよね。ごくフツーの人が、簡単に薬物入手できる現代社会に我慢ならなくて、ね。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 91 話】 ここに倒れてる女人だって、クスリに取り憑かれ、苦しんでいたのかもしれないんでしょ。薬物中毒で亡くなったのかもしれないんでしょ。だったら尚更じゃない。この人のためにも、一刻も早く真実を明らかにしましょうよ。ね？」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第92話】そんな屁理屈で先輩を説得できるわけがない、と眞鍋が内心ほくそ笑んだ。ほら、北岡さんも歯軋りしながら拳を震わせているではないか。分からず屋の従妹に相当ご立腹なご様子だ。その北岡が、語気鋭く言葉を発した。「わかった」「えーっ？」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第93話】「やっぱ、いちにいはそうでなくっちゃ」鈴香の微笑みに北岡は力強く頷き返すと、ラウンジへと駆け出した。長らくトイレを封鎖していた団体の大きい男を、その場に居合わせた客たちが疎ましげに見やる。そんな彼らに、北岡は身分証明書を掲げて叫んだ。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第94話】「警視庁のほうから来ました北岡と申します。只今、このトイレで女性が亡くなっているのが発見されました。事件性はないと思われますが、念のため皆様には、しばらくこの場で待機していただきます。どうぞご協力のほど、よろしくお願ひいたします」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第95話】「げげーっ！」首でも絞められたのか、眞鍋が舌を伸ばして小さく叫んだ。「ちょ……何を馬鹿なことを。上司にバレたら大目玉じゃ済まないですよっ」慌てふためく眞鍋をよそに、鈴香は声を上げて笑っている。「思った通りになったわ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第96話】訝し気に振り向いた眞鍋に説明してやる。「あの人、昔から『ヒーロー』という言葉に弱いのよ。そこをくすぐってやれば、後はちゃんとしたロジックは必要ない。雰囲気だけでも乗っちゃうから。ホンッと、相変わらずよねえ、いちにいは」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第97話】末恐ろしい女だ、と眞鍋は思った。そして再び先輩を見て、雨に打ち拉がれる捨てられた子猫、いや老いた大型犬を見るような、可哀想な気持ちになった。「警視庁のほうって……大雑把に言えばそうかもしれないけど、消火器詐欺じゃないんだから」

つぶやきミステリー「ヤジキタ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 98 話】身分証明書も警察官と同じタイプのものを使用しているから、つぶさに見られなければ違いもわからない。「ほら、あなたも北岡先輩を手伝ってあげて。何かあった時は、連帯責任になるんだから」人ごとな小娘を、眞鍋は恨めし気に睨むしかなかった。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 99 話】「まずはざっと、現場を調べてみるか。ええと——」「私は田中と申します」北岡に立ち会いを求められた店員が、素早く名乗った。「田中さん、ゴム手袋があれば貸していただきたいのですが」もちろん、自分の指紋をつけないようにするためだ。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 100 話】田中は掃除用具入れの扉を開き、こなれた所作で、2人分の使い捨てビニール手袋を取り出し、刑事——もとい麻薬取締官たちに手渡した。掃除用具入れの左半分は、モップや雑巾を洗うための底の深いスロップシンクで占められている。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 101 話】右側には大型の掃除機やモップが所狭しと置かれ、鈴香の頭の高さで横に走った物干竿には、濡れた雑巾が掛けられている。窮屈ではあるだろうが、鈴香くらいの体格であれば隠れられないこともない。続けて、死体のあるトイレ室内に目を向ける。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 102 話】床には女のものと思われるシャネルのハンドバッグと、その中から零れたらしい口紅やコンパクト、それにサングラスが散乱していた。女の手にはハンドバッグの代わりに、黄色い鈍い光沢感のある巾着袋が握られている。「何だこれは」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 103 話】北岡が死体を動かさないようにしながら、巾着袋の紐を緩め、中身を取り出した。細く折られた一万円札が5、6枚。「まるで裏切り者のユダのようねえ」「ユダ?」「何でもない。気にしないで」北岡は首を傾げながら、今度はハンドバッグに着目する。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第104話】「……眞鍋」「はいっ」手招きされた彼がバッグの中を覗き込んだ。「これは……」「ああ、間違いないだろうな」「ねえ、何が見つかったの」後ろから声を掛けてくる鈴香に、北岡は振り向きもせずに言った。「何でもない。気にするな」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第105話】「ああ、そういう大人げないことするんだ」「お前の真似をしただけだ」鼻で笑う北岡だが、情報開示の意志はあるようだ。「覚醒剤だよ。この女、やっぱりこの店で取引してやがった」死体を見下ろすその視線には、どこか侮蔑の色が混じっている気がした。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第106話】「この覚醒剤の量を見ても、巾着袋の中に入っている金額は妥当な取引額だ。密売人はこの一室に覚醒剤を隠し、この女を呼びつけたんだろう」「まさか、ウチのトイレがそんなことに……」普段は冷静沈着そうな田中も、ショックを隠せないでいる。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第107話】「でも、ブツはどこに隠してたんスかね」眞鍋が欠伸しそうな顔で質問した。「他の客にバレないような場所か。あそこは?」北岡は天井近くの高い位置にある、突っ張り棒で支えられた棚を指差す。トイレットペーパーが積み重なっているのが見えた。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第108話】「この店は天井が高いので、デットスペースを有効活用しようと取り付けたものです。あそこなら私でもやっと手が届く高さですし、奥行きもありますから、何か隠されていても誰も気がつかないでしょうね」田中が罰が悪そうに説明した。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第109話】「定期的な点検はしていないんですか」「毎日、閉店後に備品のチェックのため棚の上を確認しますが、一時間毎の点検では、そこまで見ていないのが現状です」「なるほど。密売人はそういった裏事情に精通している、という可能性もあるな」

つぶやきミステリー「ヤジキタ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第110話】北岡の言わんとしていることを察したのか、田中の顔色が曇った。「刑事さん。まさか、我々従業員の中に、犯罪に手を染めている者がいるとでも?」「そうは言っていません。ただ、可能性の話をしているだけですよ」「ふうん、可能性ねえ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第111話】背後で嫌味をたっぷり含んだ従妹の声がした。どの口が言うのか、と続きが聞こえたような気がして、北岡は目もくれずに舌打ちした。「でも」後輩の口から、再び逆接の接続詞が飛び出した。「彼女はどうやって、あんな高い所のヅツを取れたんですかね。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第112話】だって、この人、かなり小柄でしょ」たしかに、彼女の身長は160cmにも満たないだろうが「お前の目は節穴か」と、北岡に一蹴される。「便器の蓋を閉めて、踏み台にすりやいい話だろうが」「あっ、そうか」「そうか、じゃねえだろ。頼むぜホント」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第113話】もはや北岡は怒る気になれず、捜査を先に進めることにしたようだ。巾着袋を示して「これはどちらが用意したものかは判らねえが、女はこいつに金を入れ、棚の上に隠そうとした。そこで、心臓麻痺を起こした——待てよ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第114話】何かに気づいたのか、倒れている女の頭を手で支えながら、後頭部辺りの髪を搔き分けて、まじまじと見つめている。が、やがて溜息。「転倒して、壁か床に頭を強打した可能性を閃いたんだが——やっぱり、そんな痕は無いみたいだ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第115話】最初は現場保存に執着していた北岡も、女が覚醒剤を使用していたことが確定して吹っ切れたのか、今度は死体の右腕を掴むと一気に袖を捲くし上げた。肘の裏を中心に、注射痕のようなものが点々と褐色の斑模様になっている。「ポンプの常習者だな、こりゃ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第116話】「それにしては刺し方が雑ですねえ」真鍋が物知り顔で感想を述べた。「ああ」北岡は彼女の腕を元通りに戻す。「あとはこの女が誰なのかなってことだが、バッグの中には特に身分証明になるモンは入ってねえしな」「内森のぞみ、28歳。風俗店勤務」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第117話】機械的な抑揚でプロフィールを列挙したのは、鈴香だった。「おい、なぜお前がそれを知っている」「これっす」鈴香が携帯電話を示し見せた。「誰のだよ」「彼女のだよ」あっけらかんとして、死体を指差してみせる。「こらっ、勝手に遺留品を弄るなっ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第118話】赤鬼じみた顔の北岡に、あっという間に取り上げられる。「大丈夫、ほら」掲げた両手には、いつの間にかビニル製手袋が嵌っていた。「そういう問題じゃねえ。どこにあった」「ジーンズのポケット」彼は携帯電話を元ある場所に収めようとして、また聞く。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第119話】「どういう向きで入ってた」「もう、細かい男は嫌われるよー」「いいから早く言えっ」「……アンテナが上。ボタンがあるほうが手前よ」現場の回復作業を終えた北岡は、鈴香を詰問する。「まったく、いつの間に盗った?」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第120話】「だって、いちにい全然気づかないんだもん。ずっとケータイ弄ってたっていうのにさ」「たくっ、油断も隙もねえな、お前はよ……で、ケータイにそんな情報が載ってたってか」仏頂面のまま、従妹に尋ねる。「断片的に、だけどね」彼女が得意げに笑った。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第121話】「メールの履歴を見ると、彼女は知人や友人から『内森』または『のぞみ』と呼ばれている。それに2カ月前に男友達から誕生日を祝われていて、その返信メールを辿ると『あと2年で三十路』という記述があったからね」「かーっ、短時間でよくもそこまで」

つぶやきミステリー「ヤジキタ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第122話】「ケータイ世代ですから。それと重要な情報がもう一つ」風俗嬢であると断定した件を聞きたかった眞鍋だったが、話題が次へと移ってしまったことを悟り、開きかけた口を噤んだ。「密売人と思しき電話番号が判ったよ」「本当か」北岡が身を乗り出す。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第123話】「うん。最新の着信履歴とリダイヤルはどちらも同じ番号だった。それもアタシがこの店に入ってからの時間だしね。タイミングからして、取引相手と連絡を取り合おうとしたんじゃない? ま、どっちも一方通行で通話はしていないみたいだけどね」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第124話】「相手の名前は登録されてないのか?」「『ハシモト』って出てたけど、たぶん偽名じゃないかな。相手はクスリの売人だし。しかも、この『ハシモト』とは、1週間前を皮切りに、何度もやり取りしてる形跡がある」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第125話】「取引条件や受け渡し場所の、最終打ち合わせをしてたってわけだな」おそらくね、と鈴香が頷く。「ま、それは取引相手に聞いてみるのがてっとり早いんじゃない?」「それも警察が到着してからの話だな。接触するには時期尚早だ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第126話】冒険しようとしている従兄に、鈴香は物足りなさ気に頬を膨らませた。「やっぱり、内森のぞみは『ハシモト』ってヤツと口論になり、その弾みで殺されたんですかね」と、眞鍋。「おいおい、お前まで“殺人説”を唱えるのかよ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第127話】「だって、薬物による中毒死だとしても、肝心の注射器が見当たらないじゃないですか。天井には火災報知器もあるから、“あぶり”だってできないし」「“スニッフ”だと、他にも方法はあるだろうが」「それだってストローが必要ですよね」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第128話】「道具は水洗便所に流しちまえばいいだけの話だ」その手の専門知識が無い鈴香は、すっかり蚊帳の外だ。「じゃあ、百歩譲ってこれが殺人だとしてやる。で、犯人はどうやって鍵の掛けた密室から抜け出したんだ」「そ、それは……」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第129話】言い淀む眞鍋に代わって、この分野では専門家の鈴香が答える。「一口に密室と言っても、大きく分けて2つあるんだよ。犯人が意図して作り上げた密室と、意図せずに出来上がってしまった密室がね」「意図せずに、だと?」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第130話】「これは、あたしの想像の域を出ないんだけど」断りを入れてから推測を述べる。「例えば被害者は巾着袋に金を入れ、この個室で犯人と直に接触していたと考えるの。」「いや~、僕もそう思ったんだよね。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第131話】先にブツを渡しちゃったら、金払わずにトンズラされるリスクがあるからねえ」「お前は黙ってろ」眞鍋を睨み付けたその目を、従妹にも向けた。「この女は覚醒剤を買おうとしてたんだぞ。素性の知れぬ密売人なんぞと、なるべく接触なんかしたくないだろう。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第132話】最近の売人だって、お前が思うより紳士だぜ。客が女なんだから、その辺を考慮するはずだ」「アタシの想像に過ぎない、って言ったでしょ。最後まで聞きなって」なおも何か言いたげな北岡をよそに、女子大生素人探偵が話を進める。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第133話】「で、取引に関するトラブルが発生したとする。犯人は毒針か何かで被害者を襲った。彼女は次の攻撃を回避すべく、無我夢中で犯人を突き飛ばし、個室から追い出して鍵を閉めた。けれど、全身に毒が回って、巾着袋を握ったまま落命した。

つぶやきミステリー「ヤジキタ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第134話】だとすれば、彼女とトイレで接触可能だった人間が犯人ということになる」「クスリの売人も危険と隣り合わせの商売ですからね。いざという時のために、凶器くらい持っていてもおかしくはない」鈴香に良く思われたいのか、何かと彼女の肩を持つ眞鍋。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第135話】「お前、随分と軽々しく言うじゃねえか」北岡は露骨に不機嫌な顔を見せる。「どう? “密室”と“殺人”を切り離して考えれば、一応の筋は通るでしょ」「それでもお前は、あくまでも“可能性”を述べたに過ぎない」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第136話】「だあかあらあ、その可能性から真実を引き出そうってんじゃないのさ」啖呵を切りながら、鈴香は後ろで出番が来るまで控えていた店員を呼びつける。「田中さん、この店には防犯カメラはありますか?」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第137話】被害者と前後してトイレに向かった客さえ判明すれば、一気に容疑者を絞り込むことができる。「ありません。店内すべてを見通せる、開放的な空間がウリですから」彼だと嫌味に聞こえないから不思議だ。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第138話】「そのわりにはトイレが死角になってると思うんだけどな。せめて誰か入ってるか判るようなランプとか、取り付けないのかな?」それさえあれば、確認のために何度も席を立ったりする必要もないし、誰かさんに乱暴に扉を叩かれることもなかった。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第139話】「私もオーナーに提案したのですが、それも店の雰囲気にはそぐわない、という鶴の一言で却下されました」田中は自らの力不足を補うが如く、次に気になることを言い出した。「でも僕、御手洗いに行った人を覚えているんです。順番も含めてね」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第140話】「……どうして？」ありがたいことなのに、思わず詰問口調になってしまふ。用を足しに行く人を逐一観察しているなんて、不審と言えば不審だ。「どうしてって言われると……美辞麗句に聞こえるかもしれませんが、お客様への気配りへの一環、ですかね。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第141話】『髪の毛一本にまで気を配れ』。これは当店のクレドに刻まれた、従業員の心構えの一つですが、お客様が今、何を求めていらっしゃるのか、その僅かなサインを見逃さないためには、常に皆様に意識を集中しておかなければなりません」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第142話】なるほど。開放的な空間には、客席全体を見渡せるように、という意味合いもあったということか。「だから、御手洗いに向かった人だけチェックしていたのではなく、店内全体を視野に入れながら、個々のお客様に留意していたと捉えていただければ幸いです」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第143話】「で、彼女と前後してトイレに立ったのは？」正直、鈴香は話を早く先に進めたかった。“本物”的警官が到着すれば、素人探偵がしゃしゃり出る幕はなくなってしまう。「あなたですよ」田中が掌を上に向けて柔らかに指し示したのは、他ならぬ鈴香だった。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第144話】「……はいっ？」「被害者の直前に向かわれたのは、あなたです」「そうか、やっぱりお前だったか」北岡が嬉しそうに頷いている。何が“やっぱり”だ。従兄に食い付こうとする鈴香に、田中が付け足す。「しかし、あなたは無関係です」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第145話】「どうして？」今度は顔全体に悔しさを浮かべる北岡。「被害者の方……内森さん、でしたっけ？ 彼女はすぐ自分の席へと戻って行った。その後しばらくして、再び向かわれた時もしっかりと足取りでしたし、あなたが内森さんを襲ったとは考えにくい」

つぶやきミステリー「ヤジキタ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第146話】こやつ、出来るな。鈴香は密かにライバル心を燃やさずにはいられなかった。「ですから、彼女が2回目に席を立ってから、遺体となって発見されるまでにトイレから出てきた、あるいはトイレに近づいた方々をピックアップしてみたいと思います」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第147話】最初からそうしてくれればいいのに。こいつも結構、性格が悪いようだ。「まずは内森さんが戻って来た後に、席を立ったご婦人です」袋小路の影から、ラウンジでだべっている相手をそっと指し示す。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第148話】鈴香と入れ違いに、向かいの女性専用トイレに入った、カシマシ中年娘3人組の頭だ。「次に、喫煙席の一番こちら側に座っている、スキンヘッドの男性です」それも彼女は見かけている。「その後であなたが——」「鈴香でいいよ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第149話】別に親密になりたいというわけでもなかったが、彼にはすんなりファーストネームで呼ぶことを許せた。棚橋にねちっこく下の名前を呼ばれた日には、良くてさぶいぼ、下手をすれば蕁麻疹さえ出そうなものだが。「鈴香さんが戻ってきましたね。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第150話】その後で内森さんが向かわって、男性、女性の順で席に戻って来られました」「ハゲ、デブの順ね」歯に衣着せぬ毒舌だ。「被害者が袋小路に消えてから、他の二人が姿を現すまでの時間はどれくらいでしたか」北岡が尋ねる。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第151話】「正確には覚えておりませんが、男性が30秒足らず、女性も1分から1分30秒程度だったと思います」「男が30秒弱、女が1分から1分半、と」眞鍋が必死に手帳に書き留めている。先輩に日頃から、そういう役回りを押し付けられているのかもしれない。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第152話】「それからカウンター手前の席にいらっしゃる、スーツの若い男性が向かわれました」あの気弱そうな就活生か。「さらに、喫煙席の向かって左奥の若い女性が席を立ちましたね」自分にクリームを付けた女を、何事もなかったかのように爽やかに見つめている。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第153話】「5分、いやもう少しくらいしてからですかね。女性は一度席に戻られました。男性がラウンジに姿を現したのは、それからまもなくのことです。入れ替わりに、再び女性がトイレに向かわれました」「で、その女は戻ってくるなり、あなたに文句を言いに来た」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第154話】鈴香が続きを口にすると、田中が驚きを露にする。「文句なんてとんでもない。アドバイスを戴いたんです」「どんなアドバイスを?」先輩を差し置き、眞鍋が早口に問うた。彼も北岡も、例の一悶着については知らなかつたので、田中が経緯を説明してやる。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第155話】「なるほどね」了解した似非刑事たちは、先を促す。「ていうか、その次は俺なんですけどね。ふひっ」何が面白いのか、眞鍋が吹き出している。「ええ、刑事さんも向かわれましたね。でも30秒くらいで戻ってきた」「だって全然出てきそうもないんだもの。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第156話】これは奴さん、相当の長っ尻だなって踏んだわけですよ俺は」自信満々に、どうでもいいことを言う。「そうか、“やっぱり”お前だったのか」どこかで聞いたような台詞だ。「違いますって、北岡さん。俺は清廉潔白、洗い立てのシャツも真っ青な真っ白でー」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第157話】減らない口が、先輩から放たれる異様な眼光によって塞がれた。「つまり容疑者は、4人の客と、1人の軽佻浮薄な“麻取”ってわけだな」「そんなあ、勘弁してくださいよお」低音で甘ったれた情けない声を出す。「うるせえ、疑われるようなことすっからだ」

つぶやきミステリー「ヤジキタ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第158話】「だって、尿意は不可抗力じゃないですか。自分が接触する機会がなかったからって、そんな他人事みたいに」「ううん、いちにいにだって接触の機会はあるよ。マスターキーでドアを開けたとき、被害者の首筋に触れたじゃない。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第159話】あの時、脈を計るフリをして、毒針を刺したとも考えられるわね。いちにいらしい大胆な犯行だわ」「あ～、そんなトリックを」「馬鹿言うなっ」北岡がいきり立つ。「だったらガイシャの首筋を見てみろよ。どこに針を刺した跡があるのか言ってみろってんだ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第160話】「じゃあ、腕を確かめたときにたくさん注射痕があったでしょ。その上から毒針を刺したんだね」「ざけんなっ。見たのか。え、お前その瞬間を見たのか」「あの、まだ続きがあるんですが」田中が犬も喰わないドタバタコメディに、ぱっさりと割って入った。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第161話】「最後に、もう一度あの男性が御手洗いに向かいました」リクルートの若者か。「すぐ戻ってきて、しばらく席にいらっしゃいましたが、男女兼用トイレが一向に空かないと、私におっしゃいました」「それで女性の店員さんに、確認してもらったんですね」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第162話】「ええ、私も内森さんが一向に戻って来られないことに懸念を抱き始めていたので、同性である彼女を向かわせました。彼女は私の命令を受けて行動したわけですから、今回の事件とは無関係です」先回りするかのように、きっぱりと身内の容疑を否定する。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第163話】「彼女が不安そうな表情でトイレに向かったのを見て、張り込んでいた我々も何かあったのかと気になりました。ですから、あなた方にご同行を願ったのです」「半ば強制的にね」鈴香の嫌味を無視し、北岡は入口を窺った。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第164話】そろそろ近隣にある交番の制服警官が駆けつけてもいい頃だ。このまま権限を持たざる捜査を続けてもいいものか、思案しているのかもしれない。しかし彼は、すぐに決断を下した。「よし、重要参考人である客一人ひとりに、取調べを行おうっ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第165話】「よっ、キタさん日本一っ」鈴香が間の手を入れる。表面上は道化ではいるが、さんざん犯人扱いして茶化してもいるが、彼女は北岡に感謝していた。ここまで彼を巻き込んでしまった以上、必ずや事件の解明に辿り着かなければならない。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第166話】鈴香は自分の頬を両手で叩いた。そして、これからピアリングをかける四人の男女を、順番に、等分に見回した。犯人がこの中にいるとしたら、絶対に逃がしてなるものか。本番は、これからだ。
(第2章・完)

第3章 呟く果ての真実

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第167話】「ちょっと話を聞かせてくれるかな」北岡が精一杯のフレンドリーな笑みを貼り付けながら、スキンヘッドの大男に近づいた。当然と言うべきか、相手は全身で警戒の色を表した。牙を剥く野獣よろしく、睨みを利かせている。「俺が何をやったって言うんだよ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第168話】「誰もキミが何をしたなんて言つてない。捜査に協力してほしいだけだ」あれほど保守的だった北岡も、いつの間にやら、すっかり刑事気取りだ。かねてより彼も、こんな役を演じてみたかったのだろうか。「何で俺が、あんたらに協力しなきゃなんねえんだよ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第169話】スキンヘッドは粹がってはいるが、何か後ろめたいことがあって、それが露呈するのを恐れているようにも見えた。「協力してやんなよ、コウちゃん」男と一緒にいた国籍不明の恋人が、舌足らずな日本語を発した。「何も悪いことしてないんだったらさ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第170話】恋人の助言に、男は仏頂面ながらも応じる気になったようだ。「じゃあ、こっちに来てくれるかな」北岡が手招きして、従業員室へ連れて行こうとする。田中の計らいで、一室を貸してもらうことになったのだ。「おいっ、俺を取り調べるつもりか」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第171話】いちいち突っ掛かってくる猛獸を、その都度、彼女が宥める。「まあまあ、アタシが付いててやるからさ」「いや、話を聞くのは彼一人で……」「いいからいいから」北岡らの制止をも振り切り、スキンヘッドを強引に従業員室へと連れ込んでしまった。

つぶやきミステリー「ヤジキタ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第172話】従業員室は四畳半ほどのスペースに、ロッカーやパソコン机、そして四角いテーブルや椅子が詰め込まれた窮屈な空間だった。北岡はまずカップルを座らせ、テーブルを挟んだ向かいの椅子に、自らも腰を下ろした。その後ろには真鍋が立つ。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第173話】ちゃっかりと鈴香も入室していて、パソコン机に腰掛けていた。店員の田中の話によれば、トイレの鍵も含めたマスターキーの束は、この机の引き出しの中に入っていたとのこと。そして従業員以外の人間は部屋に入っていないということだ。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第174話】店内の状況をつぶさに把握し、記憶力に優れた彼の言うことだから、信用は出来る。わざわざ自分を含めた従業員に、疑惑の視野を絞り込む理由もないだろう。さらに彼は部屋の外で待機し、警官が到着したら即座に知らせてくれると協力を申し出た。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第175話】北岡たちに捜査の権限がないことを知った上での配慮である。「まずは名前を教えてくれるかな」北岡が小学生にでも応対するような口調で、聞き込みにかかった。「何で俺が、あんたらに名乗らなきゃなんねえんだよ」出た、また「何で」。本当に小学生か。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第176話】「あくまでも形式的に、だよ。名無しの権兵衛さんの証言じや、調書を作るときに信用ならないからね」などと、もっともらしいことを言う北岡。「……石庭だ」「イシバさんね、漢字で書くと?」「ちっ、いちいち面倒臭えな」それはこっちの台詞だ。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第177話】男の名前は石庭浩平。年齢は26歳。普段は塗装会社に勤めているが、昼前まで降り続いている雨で作業ができず、休暇を貰って恋人とデートをしていたという。アタシの作ったてるてる坊主のおかげね、と鈴香は勝手に自賛する。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第178話】「アタシはジュリアってんだ。よろしく☆」聞かれてもいないのに、国籍不明の女がウインクしながら自己紹介する。いかにも英語圏の名前だが、外国人にしては日本語が流暢過ぎるのが気になる。「……石庭さん、この女性を見なかったかな」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第179話】北岡はジュリアの挨拶をスルーし、石庭に携帯電話のカメラで撮影した、内森のぞみの顔写真を見せる。「……デスマスクかよ」死に顔、とでも訳したかったのだろうか。石庭が顔を背け、明らかさまな不快を示した。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第180話】その様子に、眞鍋が露骨に眉根を細めたが、“一般人”としては当然の反応だろう。どんよりと曇った目、不自然なほどに歪めた唇。口の端にこびり付いた泡には、真っ赤な口紅が溶けて混じり、血を吐いているように見える。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第181話】横からジュリアが興味津々に、青い瞳越しに画面を覗き込んできた。「ねえ、これマジ死んでんの？ キモくない？」やたらとテンションが高い。その軽薄な発言と言葉遣いに、北岡が眉を顰めて、誰にともなく同意を求める彼女に答えてやった。「キモかない」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第182話】「こいつなら、俺が便所から出てくるときに、外で順番待ちしてたよ」石庭がうんざり顔で言った。「グラサンの向こうから、探るようなガンを飛ばしてきやがった」あなたが麻薬密売人に見えたんでしょうね。と口にしたいのを、鈴香は懸命に堪えた。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第183話】「知り合い、というわけではないんだな」北岡の問いに、石庭は「見たこともねえ、こんな女」とムキになって返した。彼女の手前、浮気や二股といった類の、あらぬ嫌疑をかけられたくないのかもしれない。「とにかく俺は無関係だ。もういいだろ？」

つぶやきミステリー「ヤジキタ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第184話】 次に事情聴取したのは、鈴香がトイレに出るときに見た丸々しい背中、すなわち、三人組の中年女の一人だった。今回も一人でいいのに、その茶飲み友達たちも付いて来た。「さっきの二人も二人だったじゃない」「そうよ、私たちには同伴する権利があるわっ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第185話】 かくして、ただでさえ狭い空間に、3つの肥満体が詰め込まれることになった。もっとも大きい球体の名前は佐々木靖子。年齢を聞くと「教える必要がどこにあるの。これは職権乱用だわ」と抗った。セクハラだわ、とも言った。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第186話】 「53歳」代わりに鈴香が答えてやった。内森のぞみの時とは違い、見た目から推測した年齢である。靖子の顔がみるみるうちに赤らみ、ヒステリックな声を上げた。「失礼ねっ、まだ四十代よ」鈴香がにっこりと微笑んだ。「じゃ、49歳ですね」「…………」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第187話】 図星なのか、それとも喉に餅でも詰まらせたのか、靖子が絶句している。「ちょっと刑事さん、何なのこの娘は」「ホント、失礼じゃない」代わりに仲間たちが文句を飛ばす。「佐々木さんはまだ48よ」「あれ、もう五十路になったんじゃなかったっけ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第188話】 申し訳ない、と北岡が保護者よろしく謝罪する。「この娘には捜査に協力してもらってましてね。何でも彼女は、名探偵の孫娘らしいんです」従妹に感化されてしまったのか、北岡家の血筋が根源なのか、彼も悪乗りが過ぎるようだ。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第189話】 北岡刑事は、携帯電話の画面を靖子にも見せた。老眼が始まっているのか、彼女は左手で眼鏡を上げ、糸のような目をさらに細めた。「誰よ、この女」「トイレで亡くなっていた女性です」「ひっ」靖子の目玉が飛び出す。「そっ、そんなものを見せないでよっ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第190話】「トイレに入る時か出る時、この女性を見かけませんでしたか」「だ、だだ誰も見てないわよ」「以前にお会いしたことは」「しし知らないよっ、そんな何処の馬の骨かも判らぬ女っ。ア、アタ、アタシは無関係だわよっ」終いにはヒステリーを起こし始めた。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第191話】「そうよ、佐々木さんが犯人なわけないじゃない」「そうそう、私たちが証人よ。彼女はシロよ、真っ白」外野が根拠のない自信を漲らせながら、靖子を庇う。「人を殺しておいて、あんなに楽しくお喋りできるわけないじゃないの、ねえ」「ねえー」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第192話】「いや、誰もこの女性が殺されたなんて一言も」「言ってるじゃないのっ。あなたの心の声がひしひしと伝わってくるわ。どうせお前がやったんだろ、ってね」靖子はもはや、幻聴に達しているようだ。これ以上の拘束は危険だ。「最後に、一つだけいいですか」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第193話】重たそうな腰を浮かせた靖子に聞いたのは鈴香だ。「佐々木さんがトイレに行った時、2部屋とも誰か入ってましたか」怪訝そうな顔で靖子が「空いてたわよ。女性用のトイレはね。もう片方は知らないけど」と返すと、女子大生探偵は納得顔になった。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第194話】さらに、リクルートスーツの青年からも事情を聞き出す。茂木渉、23歳。別に追及したわけでもないのに、昨年は不況の煽りを喰らい、どこの企業にも拾われずに就職浪人となったことも明かしてくれた。もっとも二巡目も、取りつく島もないようだ。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第195話】このカフェで次の面接までの待ち時間を過ごしていたらしいが、本番が近づくにつれ緊張は高まり、ひどい腹痛に襲われ、5分くらいトイレに籠っていたらしい。その際、ドアの向こうで女性が誰かと話しているのが聞こえたと言う。

つぶやきミステリー「ヤジキタ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第196話】一人分の声しか聞こえなかつたと言うから、女は携帯電話を掛けっていたと思われる。「会話の内容は覚えてますか」「さ、さあ、そこまでは——あ、でも、在庫がどうとか言っていたような」「在庫、ねえ」眞鍋が面白くもなさそうに、手帳に書き留めている。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第197話】「あれ、茂木さんは向かって左のトイレに入っていたんですよね」鈴香がふと、疑問を口にした。「え、あ、はい」「と言うことは、被害者はその時間、右の女性専用トイレにいた、ということになる」「え、まあ、そうですよね、たぶん」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第198話】「で、あなたが出た後で入れ替わりに共用トイレに移動した。そうなりますよね」「そ、そういうことになるんですかね」鈴香はだんだん苛立ってきた。そんな曖昧で人任せな態度じゃ、どこの会社だって雇ってくれないよ。「でも、なぜ彼女はそんなことを」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第199話】眞鍋の投げかけに、鈴香が答える。と言うよりは、頭の中を整理していると言う方が正しい。「内森のぞみが入りたかったのは共用トイレ。でも女性専用トイレが空いているのに、何度も往復するのは怪しまれると思い、場凌ぎで入ったのか——」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第200話】「まあ、麻薬常習者の行動に一貫性がないことは珍しいことじゃない」北岡が強引に結論づける。「茂木さん、もう結構です。ご協力ありがとうございました」「あ、いえ、こちらこそ」茂木が誰にともなく会釈をしながら、右手で鞄の把手を掴んで席を立った。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第201話】鈴香は彼が目の前を横切る際、微かな香りを嗅ぎ取っていた。身だしなみとして、香水でも付けているのだろうか。それにしても曖昧な主張で、かつ魅力的なアロマではない。「よし、次だ」北岡が後輩に、最後の参考人を連れてくるよう促した。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第202話】「ホンっと、勘弁してよ。こっちはとっくに休憩時間が終わってんの。早く戻らないと今日の売上に響くワケ。刑事さん、その分の穴埋めしてくれんの、ねえ？」今までの誰にも増して非協力的な彼女は、さんざん鬱憤をぶつけた後で、渋々質問に答えた。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第203話】栗田美沙、23歳。近くにあるアパレルショップの店員で、この喫茶店で昼食を取っていたという。一度トイレに立ったが、二部屋とも先客が居たため、掃除用具入れの扉に凭れ掛けかり、携帯電話で卸会社へ洋服の在庫の確認をしていたという。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第204話】先ほど茂木が話していた電話の主とは、彼女で間違いないだろう。「3分くらいして電話切ったんだけど、結局どっちも空かないからさ。仕方なく一度、席に戻ったんだ。で、しばらくして、ひょろっとした男が出て来たのを見て、また向かったってワケ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第205話】ひょろっとした男とは、茂木で間違いないだろう。「戻って来た貴女は、店員に苦情をつけましたね」「別に大したことじゃないんだけど。芳香剤の香りについて指摘ただけ」美沙はそう主張するが、トイレが空かることへの八つ当たりである可能性が高い。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第206話】もしくは、仕事で嫌なことがあったのか。「貴女が仰ってるのは、消臭スプレーのことですよね。ラベンダーの香りが付いた」「どっちだっていいけどさ、アタシの前に入ってたヤツが撒き散らし過ぎなんだよ」と、脱色した髪を指で撫で付けている。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第207話】「話をえますが、あなたの座っていた席は、亡くなっていた女性の席と一番近いところにありました。何か、彼女について気になったことはありますか」「さあね。何だか忙しない女だったよ。爪を噛んだり、頭を搔きむしったり……貧乏搖すりもしてたかな」

つぶやきミステリー「ヤジキタ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 208 話】「よっぽど恋しかったんでしょうね、クスリが」余計なことを口走った眞鍋を、北岡が充血を伴う睥睨と、無言の圧力で制した。「他には?」気を取り直して続ける。「まあ、ファッションのセンスがダサかったよね。化粧もケバい感じがしたし。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 209 話】アタシがコーディネートしてやりたかったよ」もはや、死者に鞭打つような発言しか出てこない。お引き取り願おうと北岡が口を開きかけると「悪いけどタイムアップ。ホントに店戻んなきゃヤバいんで」と、先手を打たれた。美沙の右手から名刺が渡される。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 210 話】ラメシールが至る箇所に貼られた、無闇矢鱈にカラフルな名刺だ。美術科の端くれである鈴香が見ても、お世辞にもセンスがあるとは言えない。「何かありましたら、ここに電話してくださいね」最後になって、上辺だけの敬語と営業スマイルを出してきた。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 211 話】美沙が出て行くとすぐに、意外な人物が意外なことを言い出した。「俺、犯人がわかりましたよ」眞鍋だ。「こら、何の冗談だ」「冗談じゃないっすよ。ちゃんと根拠があるんですから」彼は、ちらと鈴香を窺ってから、北岡に耳打ちをする。「鼻息をかけるな」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 212 話】最初は眉間に皺を寄せ、邪険にしていた北岡だったが、合点の行く答えを聞いたのか、大腸に詰まった物を出し尽くしたような、爽とした表情になった。「なるほどな。あり得るかもしれない。すぐに薬物犯罪者のデータベースと照合するよう手配してくれ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第 213 話】「はいっ」眞鍋は骨を得た犬のような軽快な身のこなしで、店の外へと出て行った。「ねっ、彼は何て?」詰め寄る鈴香に、北岡が首を横に振る。「悪いな。捜査上、一般人には教えられないこともあるんだ」「出た、また“一般人”」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第214話】頬を膨らませた彼女が、せめて彼が誰を犯人と推理したのかを教えてくれと、譲歩の要求を突きつけた。「……石庭だ。理由は言えないがな」「でも薬物犯罪者のデータベースを調べるってことは、石庭さんが密売人ってことでしょ」「お前の想像に任せよ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第215話】その時だった。扉が乱暴に開き、真鍋が飛び込んで来た。「けっ、警察です」「何っ」北岡が立ち上がる。続けて、左手首に嵌めた腕時計を確認する。むしろ遅すぎる到着ではあったが、彼らの前ではもう、勝手な捜査をすることはできない。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第216話】「悪いがここまでだ、鈴香」北岡が残念そうに宣言する。「ちょくら辻褄合わせに行ってくるわ。でないと、俺たちの立場が危うい」「もう、だから俺は反対だったんですよ」「お前も最後はノリノリだったじゃねえか。犯人が判ったとか何とかよお」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第217話】言い合いになる麻薬取締官たちに「いいから、早く自分たちの身を守って」と促す。「ありがとう。私の無理なお願いに付き合ってくれて」自然に穏やかな微笑みが零れた。「ホントですよ」「ああ、まったくだ。これで俺らがクビになつたらお前のせいだ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第218話】「その時は警察官になって、私の“相棒”になればいいじゃない。次々と難事件を解決して、スピード出世させてあげるからさ」鈴香の減らず口に、また批判や文句が飛び出すかとも思ったが、意外にも出てきた言葉は「ああ、よろしく頼む」だった。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第219話】従業員室を出ると、制服警官が二人、複数の客に囲まれていた。「何でよ、どうして帰っちゃいけないのよ」 そう詰め寄るのは佐々木靖子。「そうだ、さつき女を一人帰したじゃねえか」これは石庭浩平。「そうよそうよ」「帰しなさいよ」「マジ迷惑」

つぶやきミステリー「ヤジキタ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第220話】靖子の一味も、石庭の連れも口々に文句を垂れた。茂木涉も遠巻きながら、頻りに首肯している。「な、何のことですか」年嵩の小柄な警官が、予期せぬ状況にたじろぐ。「そりゃ私たち来るのが少しばかり遅れましたけども、それは職務の一環によるものでして」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第221話】「人が一人亡くなっているんだ。大人しく協力していただきたい」先輩の分まで警察の威光を補うつもりか、若い方が横柄に言い放った。「んだテメ。俺は知っていることは全部喋ったんだ。ほらっ、あの刑事にだよ」北岡たちの姿を認めた石庭が、彼らを指差す。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第222話】「まずいな」「ええ、おてもやん食堂の鯖味噌定食より」「くだらねえ。行くぞ、プランBだ」「B定食っすね。ラジャー」事前に暗黙の打ち合わせがあったのか、すかさず北岡と眞鍋が警官に駆け寄り、手帳を懐から取り出すと、彼らの鼻先にぐいと近づけた。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第223話】「お勤めご苦労」「はっ?」「現場はこっちだ。付いて来たまえ」付いて来いとは言うばかり、警官たちの袖を引っ張り、あるいは後ろから肩を掴んで無理矢理連行する。「ちょっと、あんたたち何を」「いいからいいから」袋小路に、四人の男たちが消えて行く。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第224話】佐々木も石庭も茂木も、他の取り残された客たちも、ぽかんとしてその場に立ち尽くしている。「お客様、思いもかけないアクシデントでお疲れのところ、失礼いたします」彼らが再び帰り支度をする間もなく、店内に優し気なテナーが響いた。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第225話】カウンターを振り返ると、田中を始めとした従業員全員が横一線に整列している。「本日は当店にお越しいただいたばかりに、皆様の貴重なお時間を費やす形となり、大変ご迷惑をお掛けいたしました」田中に倣い、一同が恭しく頭を下げる。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第226話】「警察の方もまだ皆様にご協力したいことがあるようですので、この時間をお借りしまして、今週から新発売となりましたコーヒーの試飲会を行いたいと思います。もちろん無料でございますので、お好きなだけお召し上がり下さい」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第227話】“無料”の二文字に、それまで丸い顔をますます膨らませていたカシマシ中年女たちが、目を輝かせている。従業員達がそれぞれの席に新作の入ったカップを運ぶのにつれ、客たちは大人しく座り出した。香ばしく、ほんのりと甘い香りが店内を包み込んでいる。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第228話】「まるでマジックですね」コーヒーを携えて来た田中に、鈴香が称賛を浴びせた。「いえ、私たちにできることはこれくらいですから。あとは、あなたがこの事件を解決してくれるのを望むだけです」彼の口元からは笑みが零れている。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第229話】が、目は真剣そのものだ。「事件？」するとこの男も、内森のぞみは殺されたと考えているのか。「ねえ、あなたは何か掴んでいるの？」その問いに、田中はコースターの上にカップを迅速かつ丁寧に置いてから、ゆっくりと首を横に振った。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第230話】「僕はただのウエイターに過ぎません。ただ、あなたなら真相に辿り着いて、有耶無耶をはっきりさせてくれるんじゃないかなって、そんな気がしただけです」言いながら、鈴香特製“カフェオレもどき”的飲み残しをトレイの上に載せる。「そう、ですか」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第231話】聰明な青年から、事件解決の糸口を聞かされるのではないかと期待しただけに、肩透かしを喰った気分だ。「こんな時は焦らずに、じっくりとコーヒーの芳香を楽しんでみてはいかがでしょうか。

つぶやきミステリー「ヤジキタ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第232話】リラックスすることで、今まで気付かなかつたことが見えてくるかもしれませんよ」などと、悠長なことを言ってくれる。まだ熱いのでお気をつけて、と言葉を付け添え、彼は一礼して踵を返そうとした。「あ、ちょっと」「はい、何でしょう」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第233話】「瞬間記憶能力をお持ちの田中さんにお尋ねしたいんですけど」「そんな能力はありませんよ」「冗談よ。あたし、内森さんと密売人が最後に連絡を取り合った時間を書き留めているんだけど、その時の店内の状況を覚えてたら教えてほしいなって思って」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第234話】田中は微かに困惑を表情に浮かべた。「私はその時間に何が起ったかを覚えているわけではありません。あくまで誰が、どんな行動をしたかの順序を覚えているだけであって、それも数時間前のことまでは——」「まあまあまあまあ、分かる範囲でいいからさ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第235話】鈴香は化粧品の押し売りよろしく、内森のぞみの携帯電話に残されていた最新の着信・発信履歴の時間を伝えた。田中はしばし考えてから「大まかな絞り込みで申し訳ございませんが……発信の時間は、少なくとも鈴香さんと内森さんが来店した後ですね。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第236話】そして、内森さんが2度目にトイレに向かわれ、お二人のお客様が戻ってきたくらいまででしょうか」と答えた。「着信の方は?」「そちらは私が山本に様子を見に行かせた時間から逆算して、眞鍋刑事がトイレに向かわれた頃だと思います」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第237話】山本とは、例の女性店員のことだろう。「その時、店内で携帯電話を使っている人はいましたか」「そこまでは把握していません。いらっしゃったとしても、大声で話すなど他のお客様の迷惑にならない程度であれば、私も気には留めませんし」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第238話】「そうか……うん、もういいわ。どうもありがとう」解決に導く情報が得られず、少し気落ちしたのが表情に出たのか、田中も恐縮顔になる。「いえ、お役に立てず申し訳ございません」と丁重に頭を下げ、持ち場に戻ろうとした。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第239話】「あ、そう言えば」その足が、ぴたと止まる。「先ほど内森さんのコーヒーを片づけようとしたんですが、彼女、まったく口をつけていないみたいですね。何かの証拠になるかもしれないのに、念のため触れない方がいいと思い、そのままにしてありますけどね」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第240話】では、と最後にもう一度会釈をして、その場を去った。……何だ、今のとりとめもないお喋りは。今日会ったばかりの人間ではあるけれども、彼らしくないように思えた。「コーヒーに、口をつけていない？」諂ひじる様子で、鈴香は言葉にしてみた。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第241話】「……そうか、そういう可能性が」思わず立ち上がっていた。鈴香はそのまま喫煙席へと足を運んだ。途中、石庭が怪訝な顔を向けたことにも気付くことなく、内森のぞみが座っていたという席に近づいた。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第242話】彼女のコーヒーカップには、冷め切った琥珀色の液体が皿のように静かに湛えられている。田中の言うように、内森のぞみはコーヒーをまったく飲んでいないようだ。彼女の唇に塗りたくられていた口紅が付着している形跡もない。「じゃあ、いつ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第243話】つぶやきながら、元いた場所へ戻る。ふと視界に、忙しく自分の鞄の中身を漁る茂木渉の姿が入った。テーブルの上に、胃腸薬やら下痢止め薬やらを引っ張り出している。いっぺんに飲んだら副作用が心配だからか、どれを服用するか迷っているふうだ。

つぶやきミステリー「ヤジキタ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第244話】彼はこの後面接を控えているはずだが、胃腸はともかく時間は大丈夫なのだろうか。「ん、待てよ」鈴香がつぶやく。「ああ、そういう手があったか」またつぶやく。「でも、それじゃ肝心の犯人は」さらにつぶやく。「……う~ん」考えがまとまらないようだ。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第245話】髪をくしゃくしゃと搔き篭った。再び視線は茂木を捉える。もっとヒントをくれはしまいか、と。勝手に頼られていることも知らずに、茂木は眉間に皺を寄せながら、頻りに腹を摩っている。さっさとトイレに行けばいいのに。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第246話】共用トイレが封鎖されてしまった今は、緊急対策として女性専用トイレを男性にも開放しているのだから。まあ、隣の個室には死体があるのだし、狭い袋小路は四人の男たちが塞いでいるから、行きづらいこともあるだろう。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第247話】「……え?」ぼんやりとした思考の果てに、鈴香は再びつぶやいた。「それって変じゃない」どんどんつぶやく。「あっ、そうなるのか」声が大きくなっていることにも気付かず、つぶやく。「だとすると、どうなる?」ひたすらつぶやく。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第248話】頭の中を様々な映像が浮かんでは消え、くつついで離れていく。2部屋あるトイレ。4人の容疑者。内森のぞみが握っていた黄色い巾着袋。ジーンズの左ポケットにあった、びっしりとラメシールに覆われた携帯電話。その通話履歴。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第249話】「え……」つぶやく。「えっ、嘘っ」叫ぶように、つぶやく。さすがのカシマシ中年女たちも、その言動を黙って凝視している。彼女たちだけではない。茂木も、石庭も、他の客も、店員もだ。「だったら、あのことも」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第250話】視線の集中砲火もお構いなしに、鈴香はつぶやく。「あのこともっ」つぶやく。「信じられないけど、これが真実なんだ……」つぶやき通した彼女は脱力し、虚無感に襲われ、放心状態にあるように見えた。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第251話】が、それも僅かな時間だった。すぐに瞳に光を取り戻し、レポート用紙に何かを書き殴り出した。その作業を終えると、今度はトイレのある方角へと駆け出した。袋小路には北岡と真鍋が、壁に張り付くようにしていた。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第252話】若い制服警官は共用トイレの入口を塞ぐかのごとく、彼ら二人の前に仁王立ちしている。室内では年嵩の警官が現場の状況を調べているようだ。「うむ、これは典型的な心臓発作だな」死体など何の感情も湧かなくなるほど目にしてきた。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第253話】そんな苦労話が飛び出てきそうなほどに、彼の言葉は自信で満ちていた。「突然死だろう。事件性は極めて低い」とも言う。一刻も早く現場処理して、立ち飲み屋にでも直行しようとする勢いすら感じられた。「いちにい」遠慮のない大声で、鈴香が呼びかける。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第254話】「何だよっ」今はそれどころじゃない、と言いたげにする北岡に「彼女は」誰だと若い警官が尋ねた。「いえ、たまたまこの店にいた、私の従妹です」そこは正直に申告しながら、鈴香に近づき、声を殺して「何だよ」と改めて聞く。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第255話】「どう、あの人達は上手いこと諱魔化せた?」「おいっ、そんなことを聞きに来たのか。今はまずいから後してくれ」戻ろうとする似非刑事の袖が、引っ張られる。「さっきの四人の客のうちね、一人だけ嘘をついてる人がいるの」

つぶやきミステリー「ヤジキタ」

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」第256話】「……何だと」北岡の顔つきが変わった。「それは本当か」鈴香は力強く頷き「詳しく追及したほうがいいと思うんだけど。最後にもう一働きしてくれないかなあ、北岡刑事」と妖しく微笑んだ。(第3章・完)

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」登場人物紹介0】ついに、真実に辿り着いた鈴香。ここで登場人物のお遊びです。以下を参照しつつ、改めて、彼ら一人ひとりの言動にも注目してください。これが殺人事件ならば、犯人はこの中にいる!——皆様の華麗なる推理をお待ちしております。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」登場人物紹介1】矢嶋鈴香……物語の主人公。21歳。西洋美術史専攻の女子大生。レポートを仕上げるために入店したカフェで騒ぎに巻き込まれる。子供の頃からミステリー小説好きで、今回も独自の推理を展開し、事件解決へと結びつける。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」登場人物紹介2】北岡一郎……鈴香の従兄にあたる麻薬取締官。33歳。密告者からこのカフェで覚醒剤取引が行われるとの情報を受けて張り込んでいた。鈴香とは三年ぶりの再会となる。子供の頃『奉行戦士キンサー』に憧れていた。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」登場人物紹介3】眞鍋……北岡の後輩。24歳。お調子者で失言が目立つ。いつも北岡に怒鳴られている。鈴香よりも早く“犯人”の目星がついているようだが——他に140字分穴埋めできるほどの特筆事項はない。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」登場人物紹介4】田中……舞台となったカフェのフロアマネージャー。21歳。一見、何の変哲もない若者だが、巧みな弁舌の持ち主で、機転も利くため常連客やスタッフからの信頼も厚い。容疑者の絞り込みに協力するなど、鈴香たちの捜査をフォローする。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」登場人物紹介5】内森のぞみ……“事件の被害者”。共用トイレで死亡しているのを発見される。覚醒剤の常習者で、このカフェで密売人・ハシモトと取引していたものと思われる。風俗店勤務。28歳。喫煙者。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」登場人物紹介6】石庭浩平……容疑者の一人。塗装会社に所属する26歳。スキンヘッドの大男で、右腕に飛竜の入れ墨がある。「ジュリア」という国籍不明の恋人と一緒に、喫煙席でだべっていた。共用トイレに入ったと証言。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」登場人物紹介7】佐々木靖子……容疑者の一人。専業主婦。49歳。おしゃべり好きで、今日も友人二人と禁煙席の一角を長時間占拠していた。女性専用トイレに入ったのを鈴香に目撃されている。内森のぞみとは会っていないと証言。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」登場人物紹介8】茂木渉……容疑者の一人。就職浪人中の23歳。次の面接までの時間を潰していた。お腹の調子が悪いらしく、何度もトイレに駆け込んでいる。共用トイレに入っている間、ドアの向こうで女性が携帯電話で話していたと証言。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」登場人物紹介9】栗田美沙……容疑者の一人。アパレルショップ店員。23歳。昼食を取るため来店。喫煙者で、内森のぞみと一番近い席に座っていた。女性専用トイレに入った後、芳香剤の匂いがキツいと店員にクレームをつける。

【つぶやきミステリー「ヤジキタ」登場人物紹介10】その他の登場人物……ジュリア（石庭の彼女）／靖子の友人A／靖子の友人B／山本（女性店員）／年嵩の制服警官／若い制服警官／棚橋（鈴香と同じ大学で、しつこく言い寄ってくる男）／上記以外の店員および来店客の皆さん（ガヤ）

※この作品はフィクションです。登場する人物、団体は、
実在するいかなる個人、団体とも関係ありません。

※本書の無断複写（コピー）は著作権法上の例外を除き、
禁じられています。



【著者紹介】万大 twitter に「いまどうしてる？」と聞かれるたびに、タイ
ムリーな話題を入力したい気持ちを押し殺しながら、ただひたすらに、黙々
と 140 字弱ずつオリジナル推理小説「つぶやきミステリー『ヤジキタ』」を打
ち込んでおります。最後まで書き切ることができるのか？
著書に「通勤電車で座る技術！」(かんき出版)。

●ツイッターのURL：<http://twitter.com/hitodori>

ISBN4-56-789012-3

C0123 ¥000E



9012345678901

定価：本体000円（税別）



1234567890123

互いの意見を戦わす
麻薬取締官・北岡一郎と
女子大生探偵・矢嶋鈴香。
独自の捜査のうちに
浮上する四人の容疑者。
はたして、鈴香と北岡は、
この事件を解決へと導く
「相棒」となれるのか。